

ペンギンとパイヌ

連載第2回

いちろ まみ

あらすじ

前回、クラスの友達に紹介されてアルバイトの面接に来た、ペンギンのぺんちゃん。紹介された場所はなんと上野動物園でした。様々な動物に助けられながら、無事面接を終えたぺんちゃんは、一日研修をして採用が決まるということに。ぺんちゃんにとって初めてのアルバイト。どうなることやら……。

ぺんちゃんは、南極大学から日本のとある大学に留学中。この物語は、ぺんちゃんと相棒のイヌが織りなす不思議なお話。

第3話 アルバイトの一日研修

ペンギンのぺんちゃんは、上野動物園でアルバイトの研修をすることになりました。ペンギンコーナーまで、白ひげ園長が連れて行きます。

園長がてくてくてくてく、ぺんちゃんがぺたぺたぺたぺた。

今日は一日中、絶対に気を抜けません。採用がかかっているのです。ぺんちゃんは深く息を吸い込み、早足で歩きました。白くまのコーナーが見えてきたとき、園長が言いました。

「あの隣だよ」

指さされたその場所は、まるでミニチュアの南極のようでした。海に入って泳ぐもの、陸地でおしゃべりしているもの、たくさんペンギンたちが1つの空間に集まっています。ぺんちゃんは南極の匂いを思い出しました。ペンギンのひんやりした香りです。

園長に連れられるまま、ぺんちゃんは裏の通用口から柵の中に入って行きました。

「今日一日、研修をしてもらうぺんちゃんです」

園長が紹介すると、ぺんちゃんはぺこりと頭を下げました。すると、一匹の派手なペンギンが言いました。

「ちょっと、園長。水、出してくれませんか？ 朝来た飼育員、忘れていったんだけど」

園長が飼育部屋に入っていくと、みんなそろそろとシャワーの下に集まってきました。とまどいながらぺんちゃんも、みんなと一緒に一つの場所に固まります。研修の初めての活動は水浴びとなりました。シャワーの水が始めると、ペンギンたちが一斉に上を向きます。

「あんだ、どこの出身なの」

さっきの派手なペンギンが話しかけてきました。

「南極の北の端です」

第4話 ふふふふふふと田舎

道をペたペた歩いていると、緑の木がざわざわと揺れ始め、ペンちゃんの上に葉っぱが落ちてきました。見上げると、キリンが首を伸ばしてお食事中です。

「キリンさんはお腹がすいたらいつでもごはんが食べられるんだ」

長い首をうりやまし〜思いながらキリンコーナーを抜けると、ぴゅーっと突風が吹いて、ペンちゃんの上に葉っぱがた〜さん落ちてきました。すると、葉っぱの間からりんごが一つ、りんごころと転がってきました。

「りんごの落とし物べき！ 食べちゃえ」

ペンちゃんは勝手にりんごを食べ始めてしまいました。くちばしでりんごをつつまます。ツンツンツン。甘い汁が出てくると、今度はくちばしをうまく挟んで飲み始めました。ジュルジュルジュル。

りんごを夢中で食べていると、ペンちゃんのいる部分が突然日陰になりました。ペンちゃんは首をかしばながら振り返ります。すると……

そこにいたのはペンちゃんの体の何倍もある象。檻の間から伸びた長い鼻がペンちゃんのすぐ後ろまできており、先がひくひくついています。

「ふあうふあう、お前オシのりんご食べたな、ふあうふあう」

象の目がきらりと光ると、突然鼻が生き物のように動き始め、ペンちゃんの体をぐるぐる巻いてしまいました。そしてスルッ

と檻の中に引きずりこみ、ペンちゃんの体を高く上げました。りんごがぼとちと地面に落ちました。

「わあー！」

空を飛んだことのないペンちゃんは空中で大声をあげました。

「いめんべき！ 許してべき！ りんご返すべきさ〜」

ペンちゃんは象の鼻に巻かれたまま、空中で逆さにされたらぐるぐる回されたりしました。そしてときおりぐわぐわと締めつけられました。苦し〜なりペンちゃんがぺいぺい鳴いていると、象は自分の目の高さまでペンちゃんを近づけ、じっと見つめてきました。

「夕飯半分あげるべき！ ペンギン語教えるべき！ 掃除するべき！ 何でもやるから許してぺい……」

ペンちゃんは象の目を見ようと、目をかっと開けました。ぎゅっと鼻で巻かれているせいで、象の顔にピカピカ火花が散ります。目が合うと、象が突然ペンちゃんを地面に下ろし始めました。

「許してくれるべき」

地面に下ろされ、ペンちゃんがごろごろ転がっていると、象が言いました。

「オマエ、いつもイ又と一緒にいるふあう。オシ、沖繩象のふあうふあう。イ又も沖繩出身。オシたち同じ大学ふあう」

この象はイ又と知り合い。しかも、ペンちゃんとも同じ大学なのです。なんと偶然でしょう。

イ又はペンちゃんとは違い、正規の学生です。受験を突破した後、上京するためにふあうふあうの背中に乗って海を渡ってきました。イ又とふあうふあうは夢を持って共に上京してきた仲間な

のです。思ってもみないところで、友達の輪が一本につながりました。

ペンちゃんは起き上がって、ふあうふあうの鼻にひれを当ててすのすのしました。友達の印です。

ジャラジャラジャラジャラー！

そのとき、休憩を終えるチャイムが鳴り響きました。

今日は採用を決める大事な日。ふあうふあうのりんごを勝手に食べたことや時間外休憩が見つかったら大変です。

「早く戻らないとー！」

ペンちゃんはばたばたとひれを振って慌てふためきました。駆け回るペンちゃんにのっそりとふあうふあうが言いました。

「ふあうふあう、裏から行けば大丈夫ふあう」

ふあうふあうは動物たちだけしか知らない裏道を知っていました。裏道を進めば園内全ての檻につながっているのです。ふあうふあうはペンちゃんを優しく鼻で巻いて、裏道へと押し出してくれました。

「ありがとう。また来るべき」

ペンちゃんは草が生い茂った裏道をかさがさと走って行きま

した。
ガサガササッ、コテッ、ベタベタベタベタ、コテッ、ガサガササッ。

だんだんと陽が落ちて園内が赤く染まった頃、ペンちゃんの一日研修も終わりを上げようとしていました。結局ペンちゃんは何

食わぬ顔でペンギンの群れに混じり、えさの魚肉ソーセージをパるのどたいらげ、ミニチュアの海の中をすいすいと泳いで過りました。閉園となり、園長室に呼び出されました。
「ペンちゃんさえ良ければ、授業のない日にシフトで入ってくれるかな？」

園長は自慢の白ひげを触りながら言いました。

「べいー！」

こうして、ペンちゃんの採用が決まりました。ふあうふあうという新たな友達もでき、ペンちゃんは新しい生活に胸を躍らせて家路を帰っていききました。

「イヌに話そうとー！ ペひひひひ」

お話に出てきていないイヌが言っています。

「ペンちゃんばかりで寂しいわ」

次回はそろそろイヌのお話をしましょう。

（つづく）